

夏休みの時期になりましたが、子どもたちは、夏休みでも大人には、あまり関係がないかもしれません。大学は、学生の授業はありませんので、普段よりは自分の研究の時間が取れます。先日、学生が、「先生は夏休み何をしていますのですか？」という愚問（笑）がありました。先生はもう練習しなくてもピアノがいつでも簡単に弾けると思っているようでした。

かつて学生だった頃は、毎日8時間くらい練習していましたので、1日でも練習しないと、すぐに衰えるような強迫観念に襲われ、とにかく、毎日、弾かないと不安でした。その後も、演奏活動を始めてからも、演奏会のための練習に追われました。つまり、長い間、毎日毎日、長時間練習することが、結局は音楽家の宿命、使命なのです。私は、大学で教えるようになって17年になるのですが、教えるだけではなく論文や学会発表などの研究で、思わぬ時間が取られるようになりピアノの練習時間は極端に減っています。しかし、長年の練習の成果か、最近では、先月もお話したように、短い時間で効果的な練習法に変わっているようです。趣味でピアノを楽しむ時にも、短時間効果的練習が有効ですが、私たちプロの演奏家にも有効なのです。ですから、夏休みは、ピアノの練習と論文や著書の執筆で、普段集中してできないことをしますので、例年、意外に忙しい夏になります。

さて、教えるということのすばらしさは、大学で教えるようになって特に強く感じています。学生たちは、プロを目指し幼少からピアノを始め、大学受験をくぐり抜けているため、かなり高度な楽曲に取り組みます。持参する楽譜は、最新版のもので、今まで私の世代が使用していた楽譜と違ったものがよくあります。特にショパンの楽譜は、新しいショパン全集が出版され、さらに5年に1度行われる、ショパンコンクールの公式楽譜となると、私たちの世代も見過ごすわけには行きません。しかし、演奏活動だけしていた時は、長年使用してきた自分の楽譜を信頼していますので、新しい楽譜を買おうということになりません。学生が、間違えた音を弾いたと思い、その新しい楽譜を見てみると、最新の文献研究によって見いだされた研究成果が反映されて音が変わっていたりします。びっくりしますが、その楽譜にはそのように書かれているのです。もし、そのことを知らなかった場合、例えば、コンクールの審査をする場合、音を間違えたと判断してしまうかもしれないのです。楽譜は、現在、さまざまな版が出版されていて、私たち教員がそれらを知らなければならず、その時、学生たちが持ってくる最新版の楽譜がとても役に立ちます。その版を使用するかどうかは別として、アクティブな情報が得られることは、楽しいことです。また、学生が、慣例と異なる演奏をした場合も、一瞬、「それは違います」と思うのですが、再度、楽譜を見直し、学生の解釈を一度受け入れてみると、新しい発見があります。音楽は、さまざまな解釈がありますが、学生とレッスンをしていますと、ユニークな演奏に遭遇し、その時、自分の考えに固執せず、柔軟に音楽を見直すチャンスとなるように思います。音楽は、生きているということを感じられるのです。